

## 展示記録

# 女子大生誕生110周年・文系女子大生誕生100周年記念展示 「日本初の女子大生～黒田チカから1世紀のあゆみ」

加藤 諭・曾根原 理・岡安 儀之

会期 2023年（令和5）10月7日（土）～12月22日（金）

会場 東北大学史料館2階展示室

主催 東北大学史料館

後援 東北大学DEI推進センター

### (1) 企画の趣旨と開催の経緯

東北大学は2023年、日本で初めての女性の大学生が誕生してから110周年を迎えた。合わせて、文系学部における女性の大学生が誕生して100周年の節目でもあった。また、2023年度は、日本初の女子大生の一人である、黒田チカの資料「黒田チカ資料」の整理が完了した年にも当たった。

こうした点から、2023年の企画展示では、東北大学における女子大生の誕生の経緯に関する企画展示を開催することとなった。また、この展示では、整理が完了した黒田チカ資料を多数展示することとなった。黒田チカは日本初の女性理学士の一人で、本学卒業後は研究者の道歩んだ人物である。紅花などの天然色素の構造研究等をおこない、女性科学者のさきがけとして1929年（昭和4）には2番目の女性理学博士となった。黒田チカ資料は日本初の女子大生のアーカイブとしては、国内でもっとも充実したコレクションの一つであり、今後も東北大学の門戸開放の理念を語る上で欠かせない資料群となっていくことと思われる。また、2023年は東北大学の男女共同参画推進センターがDEI推進センターに改組された年でもあり、これまでの東北大学の男女共同参画のあゆみ、またDEI推進の取り組みを振り返るパネルも製作した。

このほか、ちょうど2年に1度の、片平地区などの東北大学附置研究所等の一般公開事業（「片平まつり」10/6-7）とも時期的に重なったことから、多くの一般市民にも周知する機会となった。

### (2) 展示の構成や関連行事など

それぞれの建物の特徴によって、全体を3つの部分から構成した。

日本初の女子大生の誕生および帝国大学における文系女子大生の誕生

黒田チカの生涯と黒田チカ資料

東北大学における男女共同参画、DEI推進の歴史

2023年9月30日（土）東北大学女子大生誕生110周年・文系女子大生誕生100周年記念式典時においては、展示構成を川内萩ホール2階会議室-1に移動した。10月6日にはプレス向け内覧会を実施した。あわせて関連展示として企画展期間中、史料館2階常設展示の展示縦ケース2つ分を使用して宮城県女子専門学校の展示を行った。このほか、学術資源研究公開センターとして実施した、■青葉山北キャンパス連携コーナー展示「科学者としての黒田チカと最初の女子大生

達」9月30日(土)～12月22日(金)会場:東北大学理学部自然史標本館、■川内南キャンパス連携パネル展「ここから、未来に、駆けてゆく 文系女子大生誕生から100年。」9月29日(金)～11月6日(月)会場:文系総合講義棟ホールについて、史料館は説明文や展示資料提供で連携し、各キャンパスで周年事業展示を展開する取り組みに協力した。

2023年における同企画展もしくは展示資料に関わる女子学生110周年企画関連の報道は以下の通り

ローカル報道

- 9月29日 NHK仙台放送局18:00～ てれまさ (日本初女子大生誕生経緯)
- 10月2日 ミヤギテレビ 18:15～ evey (日本初女子大生誕生経緯)
- 10月3日 NHK仙台放送局18:00～ てれまさ (黒田チカ資料の新規公開)
- 10月6日 東日本放送18:00～ チャージ (東北大学史料館女子大生展示報道)
- 10月6日 仙台放送18:10～ LiveNews イット! (東北大学史料館女子大生展示報道)
- 10月6日 東北放送18:15～ Nスタみやぎ (東北大学史料館女子大生展示報道)
- 10月17日 河北新報朝刊 (東北大学史料館女子大生展示報道)
- 10月23日 7:45～ おはよう日本東北版 (東北大学史料館女子大生展示報道)

全国もしくは首都圏での報道

- 10月3日 東京新聞朝刊 (日本初女子大生誕生経緯)
- 10月3日 マイナビニュースWebサイト (日本初女子大生誕生経緯)
- 10月3日 NHK関東圏20:45～ 首都圏ニュース845 (黒田チカ資料の新規公開)
- 10月4日 NHK全国放送6:30～ おはよう日本 (黒田チカ資料の新規公開)
- 10月6日 日本テレビニュースWebサイト  
日テレNEWS NNNセレクション (日本初女子大生誕生経緯)
- 10月15、22日 フジテレビ系5:45～ 皇室ご一家 (日本初女子大生誕生経緯)
- 12月11日 NHK全国放送～ おはよう日本 (女性研究者育成)

このほか

- ホームカミングデー報道 (佳子内親王の来学案件)
- 10月6、7日共同通信取材 (東北大学史料館女子大生展示報道)



### (3) 展示資料・展示解説一覧

#### ごあいさつ

1913年（大正2）8月21日、3人の女性が東北帝国大学理科大学に入学許可され、わが国初の女性「大学生」が誕生します。日本初の女子大生となった彼女たちの名前は、時代を切り拓いた女性として、1世紀以上を経た今もなお語り伝えられています。この入学許可された日付は、2020年（令和2）、日本記念日協会から「女子大生の日」として登録されました。また、2021年には、UNESCOの「世界の記憶」の‘Women in History’ Online Exhibitionに東北大学史料館に所蔵されている資料がWomen’s Student Record in Higher Education in Japanとして日本で唯一選出されています。

ではなぜ東北帝国大学だったのか。また、彼女たちはどのような環境の中で、大学を目指し、その後どのような足跡をたどることになったのか、東北大学が創立以来掲げる「門戸開放」の理念とともに、その挑戦を今回の展示では紹介します。

また今回の企画に際しては、日本初の女子大生3名のうちの一人である黒田チカの貴重な資料を数多く展示いたします。黒田チカ資料はご遺族から寄贈を受けて以降、これまで東北大学史料館で順次整理を進めてまいりました。この度整理を終え女子大生誕生110周年となる、2023年に新規全面公開となるもので、日本初の女子大生のアーカイブとしては、国内でもっとも充実したコレクションの一つとなります。

「門戸開放」の理念は現在まで継承され、東北大学では2002年に「男女共同参画のための東北大学宣言」を発出しました。それから20年後の2022年には多様性（Diversity）、公正（Equity）、包摂性（Inclusion）を理念とする「東北大学ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）推進宣言」を発表しています。女性の大学進学という110年前の挑戦を受け止めた東北大学は、その志を忘れず、様々な多様性の実現に向けて、全ての構成員が能力を最大限に発揮できる環境を提供し、そのための意識改革や施策を整備するための歩みを続けています。本企画展示を通じて、そうした歩みの原点を振り返り、彼女たちの110年前の挑戦について、思いを馳せていただければ幸いです。

東北大学史料館

## 1-1 日本初の女子大生の誕生 The Admission of Japan's First Female University Students

1913年（大正2）、日本で初めてとなる女性の大学生が誕生した。彼女たちは黒田チカ、牧田らく、丹下ウメ。入学を許可したのは東北帝国大学。当時の新聞は「未だかつて無かりしこと」とその偉業を報じることとなる。3名はそれぞれ東京女子高等師範学校、日本女子大学校を卒業済みで、すでに母校で教員を務めており、社会人からの挑戦でもあった。それまで女子が大学に進む道は閉ざされていた中、なぜ東北大学が日本初の試みをなし得たのか。その1つめの要因は、初代総長を務めた澤柳政太郎の女子高等教育観にあった。澤柳は優れた学術研究による社会貢献を学風に掲げる一方（研究第一主義）、文部次官の時代から欧米では女性が大学に進む事例があることを知っており、例外的なものと留保はしつつも、女子にも大学の門戸を開放し入学の機会を設けるべきだ、という考えを持っていた。

### 1-1-1 澤柳政太郎の高等教育観

1913年（大正2）10月 東北大学史料館所蔵／『婦人画報』大正二年十月号

澤柳論文「東北帝国大学入学の三女史」。澤柳は東北大学が「女子の為に門戸を開放した」ことについて、女性を正規の大学生として入学させるのは当然との持論を展開している。一方で全ての女性に高等教育が必要であるかどうかについては留保している。

### 1-1-2 東北帝国大学の入学規程

1913年（大正2）9月 東北大学史料館所蔵／東北帝国大学一覧自大正二至大正三年

東北帝国大学理科大学の入学規程には第十六条第三項に、志望学科該当の中等教員免許状所有者には試験を課し、合格した場合は入学させるという条項を設けていた。日本初の女子大生はこの条件をクリアして誕生したのであった。

## 1-2 東北大学が日本初の女子大生誕生の地であった背景

### The Background of Tohoku University, Which Admitted Japan's First Female University Students

東北大学が日本初の試みを実施した背景として、創設以来、高等学校卒業者以外の者にも受験機会を与える仕組みを整えていたことがある。その結果、一般の大学生よりも年齢を重ねた者や社会人経験者、外国からの留学生など、多様な入学者を確保していく「門戸開放」の理念が形成されていくことになった。女性の大学生誕生もこうした学風のもと進められたことであった。

また、黒田チカは志願のいきさつについて、次のような回想を残している。「長井先生（長井長義）は（中略）私に熱心なご勧告があり、さらに中川校長（中川謙二郎）のところまで自ら進言にお出かけになったほどであった。（中略）女子の大学志願は最初の企であり、見当がつかかね、きわめて心配の点が多かった。しかし先生のご熱心なお言葉に励まされ、勇気をふり起こし受験したのであった」。女性教員のキャリアアップを企図する送り出し側教育機関の後押しもあったのである。

### 1-2-1 入学に関する東京女子高等師範学校から東北帝大への問い合わせ

1913年（大正2）8月9日 東北大学史料館所蔵／『教務書類 甲／大正二年度』

東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）校長から黒田チカ（化学）・牧田らく（数学）



の東北帝大への入学について大学側の意向を事前に確かめようとした文書。卒業後は東京女高師教員に採用する予定としており、東京女高師側が彼女たちの帝大受験を同校教員の育成という観点から後押ししていたことがわかる。

### 1-2-2 入学試験・選抜試験実施の通知

1913年（大正2）7月 東北大学史料館所蔵／『教務書類 甲／大正二年度』

1913年入学試験および選抜試験の日程を通知したもの。

### 1-2-3 化学科の選抜試験問題

1913年（大正2）8月9日 東北大学史料館所蔵／『教務書類 甲／大正二年度』

黒田チカ・丹下ウメが受験した選抜試験（化学）の問題。

## 2-1 東北大学入学許可経緯 The History of Admission to Tohoku University

東北大学では1913年（大正2）5月段階で、女子入学を妨げない方針を東京女子高等師範学校や日本女子大学校へ回答、これに基づき4名の女性が受験することになる。当時は秋入学、この年の受験は8月8日から実施された。その受験の最中、翌8月9日文部省から書簡が東北帝国大学に届く。その内容は、女子を帝国大学に入学させることは前例がない重大な事件なので、東北大学が何を考えているのか聞きたい、というものであった。しかし東北大学はぶれなかった。受験の結果をもとに8月13日には黒田チカ、牧田らく、丹下ウメの合格を決定、8月21日は官報によって合格者が正式に発表されることになる（現在これは「女子大生の日」として登録記念日となっている）。この間8月16日には新聞でも報道がなされ、日本初の女子大生誕生は広く知られることとなった。

### 2-1-1 官報掲載案

1913年（大正2）8月13日 東北大学史料館所蔵／『教務書類 甲／大正二年度』

当時帝国大学の合格発表は官報に掲載されることになっていた。ここには黒田チカ、牧田らく、丹下ウメの名前がみられる。8月9日には文部省からの照会が東北帝大に届いていたが、ぶれることなく女性への大学入学の門戸を開く姿勢がみてとれる。

### 2-1-2 女性の東北帝大受験に関する文部省から大学への照会

1913年（大正2）8月9日 東北大学史料館所蔵

東北帝国大学に数名の女性が出願していると聞いた文部省の責任者が東北帝大の総長に送った書類。「女性を帝国大学に入学させることはこれまで前例のない重要な案件なので慎重に検討する必要がある」として、大学側の真意をただしている。

じつは大学ではこの書類が書かれた8月9日からすでに入試が始まっており、8月13日には3人の女性を含む合格者に合格通知を発送してしまう。総長が文部省に対し説明したのは、合格発表が終わってしばらくあとの8月25日であった。

### 2-1-3 日本初の女性学士誕生を報じる新聞

1916年（大正5）東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料IV-2-1

黒田チカが東北帝大を卒業した際の新聞報道。黒田チカ資料には新聞スクラップのアルバムが残されており、東京日日新聞、時事新報、東京朝日新聞、大阪朝日新聞、国民新聞、西肥日報、佐賀新聞、佐賀日々新聞など多数の新聞紙上でニュースになっていたことが分かる。

### 2-2 文系女子大生の誕生 The First Female Liberal Arts Students at an Imperial University

黒田チカ、牧田らくは1916年（大正5）、女性として日本で初めての学士号を取得、1918年丹下ウメは大学院に進学、日本で初めて女性での大学院生となった後、東北帝国大学の助手に任用されることになる。こうした先導的な取り組みに続いて1923年、東北大学では帝国大学初の2名の文系女子大生が誕生する。法文学部第一期生として入学した久保ツヤ（旧姓黒瀬）、櫻田フサ（旧姓磯貝）である。

久保ツヤは東京生まれ、東京女子高等師範学校を卒業後、東京女子高等師範学校、東洋英和女学校、普連土女学校などで勤めた後に入学、心理学を学ぶこととなった。櫻田フサも東京生まれで東京女子高等師範学校を卒業、東京女子高等師範学校、青山女学院での勤務を経て入学、哲学を学ぶことになる。久保、櫻田が入学した1923年は9月に関東大震災が発生した年でもあった。2名は実家の震災を乗り越えて勉学に励んだものと思われる。

#### 2-2-1 帝国大学初の文系女子大生

1923年（大正12）8月13日 東北大学史料館所蔵／『大正十二年入学法文学部学生原簿』

初の文系女子大生、磯貝フサと黒瀬ツヤの学生原簿。関東大震災で二人の高等師範学校時代の成績は焼失したと記載されている。

#### 2-2-2 帝国大学に入学した初の女性留学生

1927年（昭和2）東北大学史料館所蔵／「昭和二年入学法文学部学生原簿」

辛義敬はソウル・梨花女子専門学校の出身で、東北帝国大学法文学部で西洋史を学んだ。当時、朝鮮半島では京城帝国大学のほかに大学は認められていなかった中、東北大学に入学した辛は、帝国大学初の女性留学生となった。戦後、アメリカ軍政において韓国初の女性議員となり、1990年に建国勲章を授与された。

### 3-1 戦前の女子大生 Female University Students Prior to World War II

西田幾多郎の姪の高橋ふみは、旧制東京女子大学※から1926年（大正15）東北帝国大学法文学部に入学し、哲学を学んだ。ふみは1936年（昭和11）ドイツへ留学する直前、ラジオ講座で次のように語っている。「知識は女性の将来の天性を害うものではなく、反て豊かにし深くするものであることは例をあぐるにいとまないほどであります。欠くる所なき女性は知識的に磨かれることによって、一層その輝きを加へるといふことが出来ましょう。」

真の「知識」を追求しようと海を渡ったふみは、留学先で結核に罹患。帰国後、43歳の若さで逝去している。

ふみ同様、旧制東京女子大学※から東北帝国大学法文学部に進んだ女子学生に青山なをがいる。

のちに女性史研究のパイオニアとなる人物だが、仙台時代はふみと共同生活をしていた。戦後なをは、当時の生活を次のように振り返っている。「世の中に放り出されたことを感じたのは東北にいったときであり、女の世界というカラを破って社会にとび出したのも東北大にいったおかげです。」

女性が学問をすることに偏見が強かった時代。そんな当時の風潮も、彼女たちの探求心をかり立てる一つの要素だった。

※戦前の女子大学や女子大学校は、法律上専門学校で、大学令に基づく大学ではなかった。

### 3-1-1 青山なを「源氏物語と紫式部日記との一致」

1948年（昭和23）1月 東北大学史料館所蔵／村岡典嗣文書V-3

『故村岡典嗣先生記念論文集』に寄せた原稿。なをは法文学部に入学後、村岡（1884-1946）から指導を受け、日本思想史を学んだ。

### 3-1-2 河野多麻書簡（阿部次郎宛）

1943年（昭和18）9月1日 阿部次郎記念館所蔵書簡／記念館Ⅱ河野-1

新公開書簡。8月はじめに急に疎開することになり、表記の住所に滞在していること。また仙台へ行き、阿部次郎（1883-1959）に会いたい旨を連絡している。卒業後も教員との交流を続けていたことがわかる一つの例。

## 3-2 「男子顔色なし」— 圧倒する女子学生

### “The Faces of Male Students Turn Pale”: Overpowered by Female University Students

戦前の女子学生の多くは、1923年（大正12）に創設された法文学部に入学した。1934年（昭和9）4月14日の『河北新報』夕刊は、創設から約10年経過した法文学部の入試結果を次のように伝えている。「今年は例年より志願者が多く競争激しかった結果、数十名の高校出身者等がふるひ落とされた中に五名まで女性の合格者を出したことは同学部としても稀な記録で男子も一寸顔色なしといった観がある」

しかもこの年の入試でトップ合格したのは、旧制宮城県女子専門学校出身の堀内操。「本科選抜試験で抜群の成績を示し教授連を驚嘆せしめ」たという。入学後、操は哲学会や芝蘭会（女子大生の親睦組織）の幹事を務め、卒業後は大学院に準じる研究の場であった「専攻生」に入学している。

### 3-2-1 「昭和9年入学法文学部学生原簿」

1934年（昭和9）東北大学史料館所蔵

1934年（昭和9）の法文学部の入試でトップ合格した堀内操の学生原簿。文科哲学科に所属。旧制宮城県女子専門学校時代の成績も優秀だった。バレーボール、テニス、西洋音楽を好んだ。

## 4-1 黒田チカとその生涯 — 家族と進学 —

### Kuroda Chika and Her Life: Family and Studies before Entering University

黒田チカは、1884年（明治17）に7人兄弟姉妹の三女として佐賀県に生まれた。両親は「こ

れからは女子にも教育が必要」と考えており、チカはまず1901年（明治34）に佐賀県師範学校（現・佐賀大学文化教育学部）女子部を卒業した。小学校教員として1年の義務奉職を経て、1902年（明治35）18歳で上京し、女子高等師範学校（お茶の水女子大学の前身）理科へ進学した。1906年（明治39）に卒業すると、福井県師範学校女子部に奉職したが、翌1907年（明治40）母校の研究科に入学し、1909年（明治42）25歳で母校（東京女子高等師範学校に改称）の助教授となった。

#### 4-1-1 有朋80周年記念号

1968年（昭和43）1月 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料1-2-1

黒田が通った佐賀師範学校は、制度や名称を変えつつ現在の佐賀大学教育学部に至っており、『有朋』はその同窓会誌である。80周年記念号への寄稿の中で黒田は、「私の如く……我儘であった人には、非常に修養になった」と寄宿舎生活を回想している。

#### 4-2 東北帝国大学に入学 Matriculation at Tohoku Imperial University

チカの向学心はさらに上級学校を目指すことになる。1913年（大正2）29歳になったチカは、東北帝国大学理科大学化学科を受験し、見事合格して日本初の帝国大学女子大生3名の1人となった。官報で合格発表が行われた8月21日は、後に「女子大生の日」として、日本記念日協会に登録された。同期に丹下ウメ（1873-1955）、牧田らく（1888-1977、結婚後は金山姓）も名を連ねた。

1916年（大正5）、同学科を卒業したチカは、日本女性初の理学士の1人となり、東北帝国大学の副手として、プロの研究者の道をスタートさせる

#### 4-2-1 東北大学創立50周年記念式典関係書類

1957年（昭和32）6月 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料1-4-5

東北帝国大学の創設は、1907年6月22日の官報掲示とされるため、高橋里美総長のもと、1957年に創立50周年の諸行事が開催された。黒田は最初の女子大生の一人として招かれ、スピーチを行うなど存在感を示した。

#### 5-1 研究環境を求めて Seeking a Research Environment

1918年（大正7）から母校である東京女子高等師範学校の教授に就任した黒田チカであったが、当時の女子高等師範学校は、名前の通り中等教育機関の教師養成が中心に置かれていたこともあり、黒田は研究者としての環境を求め、1921年からはオックスフォード大学に留学、帰国後の1924年には理化学研究所の嘱託、紅花の色素に関する構造研究に取り組むようになる。同時期に財団法人啓明会からの研究費助成を受けながら、黒田は紅花の色素カーサミンの構造決定を成功させることとなり、その成果をもとに博士論文をまとめ、1929年（昭和4）「紅花の色素カーサミンの構造決定」として東北帝国大学から理学博士の学位が授与された。その後も、黒田はつゆ草、黒豆、なす、紫蘇、ウニの棘など様々な色素の研究に従事、1936年には日本化学会から第一回眞島賞を受賞することになる。

### 5-1-1 黒田チカの研究成果標本（紅花の色素カーサミン）

東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料VII-1

東北帝国大学でのシコニンの卒業研究を経て、黒田は色素の研究を進展、カーサミンの研究は1929年（昭和4）に東北帝国大学より理学博士の学位を授与された研究となった。

### 5-1-2 黒田チカの博士号授与関係書類

1929年（昭和4）東北大学史料館所蔵／『学位』15

東北帝国大学でのシコニンの卒業研究を経て、黒田は色素の研究を進展、カーサミンの研究は1929年（昭和4）に東北帝国大学より理学博士の学位を授与された研究となった。

### 5-1-3 黒田チカ着用の実験着

年代不明 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料VIII-1-2

黒田チカが実際に着ていた実験着。企画展パネル「研究環境を求めて」の中にある、理化学研究所の実験室で撮影された写真で着用している。サイズは、105×110cm。

## 5-2 ケルチンCの開発 The Development of KELTIN C

1949年（昭和24）、東京女子高等師範学校はお茶の水女子大学となり、黒田チカは引き続き教授の任に当たることになる。また、この頃の黒田はタマネギの外皮の色素研究を開始している。タマネギの外皮は戦後の物資難においても研究を進めやすい対象であったが、この色素研究の過程で、黒田は先行研究でタマネギの外皮にケルセチンが含まれていることを知り、さらにタマネギ外皮から得られるケルセチンを血圧降下の薬剤に活用することを思いつき、1953年に特許を取得する。この研究開発は、株式会社科学研究所（現・理化学研究所）ほか、多くの研究者に協力を仰ぎながら実用化に向けた臨床実験を経て、工業化にたどり着き、1956年に高血圧予防・治療薬「ケルチンC」が日米薬品から発売されることになった。

### 5-2-1 高血圧治療薬「ケルチンC」

1956年（昭和31）発売 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料VII-3

黒田チカのタマネギ外皮に関する研究から生まれた高血圧治療薬。瓶のシールには「黒田理博特許玉ねぎ外皮中のケルセチン製剤」と明記されている。戦時中褐色の染料として利用されたタマネギの外皮の成分から、血圧の降下作用をもつ「ケセルチン」を抽出し、薬品としての実用化することを思いついた黒田の研究が、結実したものとなった。

### 5-2-2 黒田チカのケルセチン特許査定謄本

1956年（昭和31）8月30日 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料I-18-1/3

「玉葱外皮よりケセルチンの抽出法」について黒田は特許を申請、1956年に特許が認められた。



### 5-2-3 川畑成子書簡（黒田チカ宛）

1958年（昭和33）2月28日 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料Ⅱ-2/に01

ケルチンCの特許を基にした奨学金を受けた女子学生からの書簡。黒田チカへの感謝がつづられている。黒田が女性化学者の後進の教育にも気を配っていたことがうかがえる。

### 6-1 叙勲 Honors

黒田は1959年（昭和34）に紫綬褒章を受章する（75歳）。これは4年前に新設された「褒章」で、学術、芸術、発明などの顕著な功績を対象とし、「ミニ文化勲章」ともいわれた。さらに1965年（昭和40）には、勲三等宝冠章を授与された（81歳）。宝冠章は、当初は女性を対象とする唯一の「勲章」で、1919年以降他の勲章の性別制限が緩んだ後も女性限定で授与されている。

黒田の「功績概要」には、「多年教育に従事するとともに、植物色素の化学的研究に成果を挙げた」と記された。11月12日の伝達式には、姪の草野茂子が付き添った。

#### 6-1-1 勲記（宝冠章）および授与通知

1966年（昭和41）11月 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料1-4-5

昭和41年の文化の日に、天皇名で国璽を捺して黒田に授与された。宝冠章は女性限定のため近年は少ない運用にとどまっているが、最近でも内親王が成年皇族になった際には宝冠大綬章が授与されている。

### 6-2 晩年 Final Years

1958年4月26日に黒田を会長とする日本婦人科学者の会が発足し、女性の研究者を支援して現在に至っている（1996年に日本女性科学者の会と改名）。また1964年（昭和39）、黒田を主人公とするNHKの子供向けドラマ「たまねぎおばさん」が放送され、黒田の研究活動を広く紹介した。主人公の黒田を演じたのは、若き日の市原悦子だった。それから4年後の1968年（昭和43）11月8日、黒田は福岡で逝去した（84歳）。

母校のお茶の水女子大学や東北大学では黒田チカ関連資料を収蔵しており、彼女の業績等を永く後世に伝えていこう。

#### 6-2-1 たまねぎおばさん 台本

1964年（昭和39）2月 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料1-20-1

昭和39年にNHKで放映された「たまねぎおばさん」の台本。東北帝国大学の受験から、ケルチンの試作品が出来るまでを扱い、さまざまな困難にも負けずに研究を進めた様子を描いている。

### 7-1 黒田チカと眞島利行 Kuroda Chika and Majima Toshiyuki

黒田チカが東北帝国大学理科大学に入学した際に、指導を受けたのは、同理科大学化学科の初代教授を務めていた眞島利行であった。眞島は黒田にムラサキソウの根（紫根）の研究を勧め、紫根の結晶であるシコニンの構造研究が大学生時代の黒田の研究テーマとなった。卒業後、1924年（大正13）から黒田が理化学研究所に籍を置いたのも眞島研究室であった。第二次世界大戦後も、黒田が関わるかたちで、しばしば眞島のもとで女性化学者の会合が開催されている。

こうした会合は、黒田が晩年、日本婦人科学者の会に関わるなど、女性研究者の地位向上への活動の前提ともなっていた。このように眞島の晩年に至っても、黒田と眞島の関係は続き、東北大学史料館所蔵の黒田チカ資料には多くの眞島利行との書簡のやりとりや、眞島の米寿祝賀会案内状などが残されている。黒田が研究者として大成する過程には、折々恩師である眞島の支援があった。

### 7-1-1 朝永振一郎宛て祝辞原稿

1965年（昭和40）11月3日 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料Ⅲ-4/100

黒田チカは、ノーベル賞受賞の科学者らとの親交もあった。これは朝永振一郎がノーベル賞を受賞した際の祝辞原稿。「本日の文化の吉日に於いて本年度のノーベル賞御受賞に対して御名誉につき謹みてお祝い申し上げ…」とある。

### 7-1-2 眞島利行を囲んで（写真）

1950年代ころ 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料Ⅴ-1-4

眞島利行は女子教育の水準を上げていく方がよいと考えていたことが、黒田チカあての書簡からうかがえる。戦後、眞島利行を囲む形での女性化学者の会合がしばしば開かれた。おそらくは黒田の主導であったろうと考えられている。

### 7-1-3 眞島利行書簡（黒田チカ宛）

1946年（昭和21）5月5日 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料Ⅱ-2/ま06/27

終戦後、眞島利行から黒田チカあての書簡。眞島は黒田の近辺に不幸が続いたことの悲しみに添いつつ、心を鎮めて研究に邁進するよう勧めている。

### 7-1-4 猿橋勝子からの書簡（黒田チカ宛）

1966年 東北大学史料館所蔵／黒田チカ資料Ⅱ-2/さ31

モスクワで開催中の国際海洋学会参加中の猿橋勝子からの書簡。猿橋は日本における女性地球科学者の先駆者で、現在優れた女性科学者に贈られる「猿橋賞」の創設者としても知られる。黒田は後年、猿橋らが1958年に立ち上げた「日本婦人科学者の会」の名誉顧問・名誉会長になっている。

## 7-2 男女共同参画の取り組みとDEI推進

Tohoku University's Gender Equality Initiatives and Promotion of Diversity, Equity, and Inclusion

20世紀初頭、東北大学が掲げた門戸開放の理念から1世紀、21世紀に入り東北大学はその歩みを更に進めている。2001年（平成13）東北大学には男女共同参画委員会が設置され、2002年に「男女参画に関する東北大学宣言」が発表された。また2006～2008年に「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」が採択、東北大学の自然科学系に在籍している女子大学院生がメンバーとなって活動する、サイエンス・エンジェル（現・サイエンス・アンバサダー）も発足した。その後も男女共同参画推進センターが開設（現：DEI推進センター）、2020年（令和2）には8月21日を「女子大生の日」として記念日登録、2021年にはUNESCOの歴史記録プロジェクトに東北大学の所

蔵資料「Women's Student Record in Higher Education in Japan」が日本で唯一選出された。また、それら一連の取り組みから2022年にはジュン アシダ賞が受賞されることとなった。同年、東北大学ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン (DEI) 推進宣言を発表、多様な人材がその能力を最大限に発揮できるよう、東北大学はそのための意識と環境をどこよりも大切にしていこう姿勢を表明した。

### 7-2-1 第1回 東北大学男女共同参画シンポジウム「学問・教育と男女共同参画」

2002年（平成14）9月28日開催 東北大学史料館所蔵

2001年（平成13）4月に、「東北大学男女共同参画委員会」が設置され、翌年その活動を報告するシンポジウムが実施された。

### 7-2-2 『Science Angel Book』

2009年（平成21）3月 東北大学史料館所蔵

編集は、東北大学杜の都女性科学者ハードリング支援事業サイエンス・エンジェル。発行は、東北大学女性研究者育成支援推進室。2006年に誕生したサイエンス・エンジェルが、国内外で科学の楽しさを伝える活動していたことがわかる。

### 7-2-3 第18回 東北大学男女共同参画シンポジウム「男女共同参画：男性の立場から」

2021年（令和3）12月11日開催 東北大学史料館所蔵

これまで女性の目線から語られることが多かった男女共同参画について、男性の立場から課題を捉え、真の共生を目指した効果的な男女共同参画のあり方を検討した。

### 7-2-4 Chica進水式（写真）

2020年（令和2）10月 東北大学漕艇部提供

東北大学漕艇部では2020年に建造した女子用舵手無クオドルプル艇を、女子大生の先輩である黒田にちなんでChicaと命名した。2023年の大学選手権（インカレ）では、Chicaクルーは8位となった。

## 8-1 卒業生の活躍（文系） Activities of Graduates (Humanities)

石沢麻依（文学研究科修了）

作家。1980年、宮城県生まれ。文学研究科博士後期三年の課程単位取得退学。2023年現在、ドイツのルプレヒト・カール大学ハイデルベルク哲学部博士課程に在籍。2021年、『貝に続く場所にて』で第64回群像新人文学賞を受賞。同作で第165回芥川賞を受賞。2022年、受賞後第一作となる『月の三相』（講談社）を刊行。

秩父英里（教育学部卒業）

作編曲家・鍵盤奏者。仙台市出身。東北大学卒業後、人生の転機を迎えバークリー音楽大学へ入学。ジャズ作曲と映像音楽、ゲーム音楽を専攻し首席で卒業。2019、2020 ASCAP Foundation Herb Alpert Young Jazz Composer Award、2020 ISJAC/USF Owen Prize を受賞。2022年9月には、1stアルバム『Crossing Reality』をリリース。また、アートや心理学など他領域とのコラボ、ナレーション録音など多様な活動を行っている。

**佐野景子（法学部卒業）**

独立行政法人国際協力機構（JICA）勤務。1990年法学部卒業。民間企業勤務を経て、1993年から1995年まで青年海外協力隊員としてジンバブエで活動。アフリカに関わり続けたいとの思いから、1996年国際協力事業団（現JICA）入団。二度のケニア駐在や外務省出向等を通じ、アフリカの開発に取り組む。ケニア事務所長として、2016年の第6回アフリカ開発会議の成功にも貢献。帰国後は沖縄センター所長、経済開発部長を務め、2022年からJICA監事。

**奥山恵美子（経済学部卒業）**

第33代仙台市長。1951年秋田県生まれ。1970年経済学部に入學。男性と対等にできる仕事として公務員を志望する。仙台市職員として女性企画課長、市民局次長、副市長などを歴任。2009年、全国初の女性政令市長として仙台市長に初当選し、連続2期を務める。市長を退任後の2018年6月から株式会社七十七銀行社外取締役。

**8-2 卒業生の活躍（理系） Activities of Graduates (Sciences)****本橋ほづみ（医学系研究科修了）**

医学研究者。1990年医学部卒業。東北大学医学部耳鼻咽喉科にて初期研修医。1996年大学院を修了し、博士（医学）取得。筑波大学、ノースウエスタン大学（アメリカ）を経て、2007年より東北大学大学院医学系研究科准教授。2013年より加齢医学研究所教授。2023年からは医学系研究科教授として教鞭をとる。

**熊田佳菜子（薬学研究科修了）**

薬学研究者。2010年薬学部卒業。2017年大学院を修了し、博士（薬科学）取得。大学院生時代は、東北大学サイエンス・エンジェルとして活動。その後、製薬企業研究員、本学薬学研究科助手・助教を経て、2023年からは産業技術総合研究所触媒化学融合研究センター主任研究員。学生時からさまざまな方法を使って（現在ではAI）、効率的な有機合成反応を開発している。

**小仲美奈（工学研究科修了）**

宇宙工学エンジニア。渋谷教育学園渋谷中高校卒業後、東北大学へ進学。工学部を早期卒業、同大学院工学研究科航空宇宙工学専攻修了。カリフォルニア大学（アメリカ）、国際宇宙大学（フランス）、ベルリン工科大学（ドイツ）へ留学。JAXA、パリ天文台、大手企業研究所などで宇宙技術の研究開発を行う。

**横向慶子（農学研究科修了）**

農学研究者。1984年農学部卒業、1986年同大学院農学研究科修了。大学院修了後、キリンビール株式会社に入社し、現キリンビバレッジ社「午後の紅茶」など清涼飲料の開発。米国留学を経て、1993年東北大学にて博士（農学）取得。帰国後、キリンビール基盤技術研究所、マーケティング部、ブランド戦略部、研究開発本部等で基礎研究、商品開発、調査、研究企画管理などを経験。2020年より新潟食料農業大学教授。










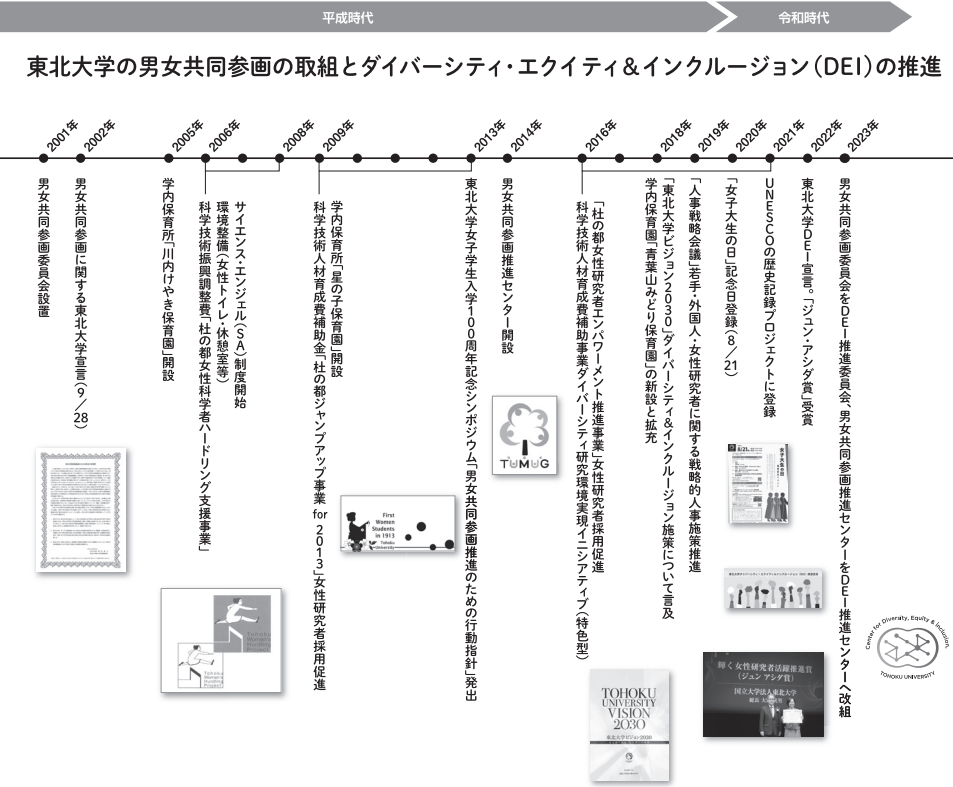
## 東北大学の男女共同参画の取組とダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン( DEI)の推進

女子大生誕生一〇〇年／文系女子大生誕生一〇〇周年記念展示

### 黒田チ力から 日本初の女子大生 一世紀のあゆみ



平成時代 令和時代



2001年 男女共同参画委員会設置

2002年 男女共同参画に関する東北大学宣言(9/28)

2005年 学内保育所「川内けやき保育園」開設

2006年 サイエンスエンジェル(心)制度開始  
環境整備(女性トイレ休室等)  
科学技術振興調整費「女性の科学者ハートリング支援事業」

2008年 学内保育所「星の子保育園」開設

2009年 科学技術人材育成費補助金「社の都ジャンプアップ事業 for 2013 女性研究者採用促進」

2013年 東北大学女子学生入学100周年記念シンポジウム「男女共同参画推進のための行動指針」発表

2014年 男女共同参画推進センター開設

2016年 「社の都女性研究者エンパワーメント推進事業」女性研究者採用促進  
科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」

2018年 「東北大学ヒューマン3.0ダイバーシティ&インクルージョン施策」について言及

2019年 「人事戦略会議」若手・外国人女性研究者に関する戦略的人事施策推進

2020年 「女子大生の日」記念日登録(8/21)

2021年 UNESCOの歴史記録プロジェクトに登録

2022年 東北大学DEI宣言「シン・ファンダ賞」受賞

2023年 男女共同参画委員会をDEI推進委員会、男女共同参画推進センターをDEI推進センターへ改組

## 黒田チ力年表

明治時代 大正時代 昭和時代



1884年 佐賀市で誕生

1901年 女子高等師範学校理科入学

1902年(18歳) 女子高等師範学校女子部卒業

1906年 女子高等師範学校理科入学 東北大学創立

1907年(22歳) 女子高等師範学校研究科修了

1908年(23歳) 東京女子高等師範学校研究科修了

1913年(29歳) 東北帝国大学理科入学。日本初

1916年 東北帝国大学化学科卒業

1918年 東京女子高等師範学校教授

1918年 東北帝国大学化学科教授

1921年(37歳) イギリスに留学。W.H.パーキン教授に師事

1923年 アメリカ経由で帰国

1924年 理化学研究所(眞島研究室)嘱託となり、紅花の色素の構造について研究開始

1929年(45歳) 日本化学会より第1回眞島賞受賞

1936年(52歳) 日本化学会より第1回眞島賞受賞

1939年(55歳) お茶の水女子大学退官。同大学名誉教授

1942年(58歳) お茶の水女子大学教授

1945年(61歳) ケルチンC発売

1946年(62歳) お茶の水女子大学退官。同大学名誉教授

1956年(72歳) 紫綬褒章受賞

1959年(75歳) NHK総合テレビ「黒田チ力が主人公のドラマ」たまねぎおばさん放送

1964年(80歳) 勳三等宝冠章受賞

1965年(81歳) 死去

1988年(84歳) 黒田チ力資料の東北大学への寄贈決定

2013年 黒田チ力資料が東北大学史料館へ正式に寄贈

2014年 「科学研究費基盤研究」黒田チ力の生涯―最初的女子学生の研究、教育、人間社会―開始(2017年)

2017年 黒田チ力資料の公開

2023年 黒田チ力資料の公開